慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国における福沢諭吉研究 : 主として李永熾の『福沢諭吉社会思想之研究』について
Sub Title	Chinese studies on Yukichi Fukuzawa
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.1 (1977. 1) ,p.75- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19770100-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

中国における福沢諭吉研究

主として李永熾の『福沢諭吉社会思想之研究』について

佐藤一郎

一、

近代中国において福沢諭吉がどのように評価されてきたか筆者も関心を持っているが、先に慶応義塾編の岩波版の『福沢諭吉全集』(再版)の附録に和田博徳教授の詳細な紹介があるので重復を出来るだけ避け、梁啓超と魯迅の場合について述べておきたい。中国最大の啓蒙思想家梁啓超の活動の最盛期をいつまでと考えるかについては研究者の間でいくらか見解が分れている。例えば新中国になってからの業績でいえば、朱永嘉は「批判梁啓超的唯心主義哲学」で全社会活動期を四つに分け、その第一期を一八九五～一九〇三とし、王介平は「論改良主義者梁啓超～梁啓超政治思想的批判～」で同じく四つに分け、その第二段階を日本逃亡～革命派との論争、一八九八～一九〇五としている。梁啓超が福沢諭吉について論じているのは、一九〇二年であるから、朱永嘉によればその最盛期、つまり思想的影響力の最大の時期に、王介平によれば第一段階の康有為従学から戊戌政変にすぐ続く時期に発言していることになる。明治維新を中国近代化のための身近かな手本として意識した立憲君主論者の梁啓超にとって、福沢の存在は決して小さなものではなかった。一九〇二年に前後して書かれた「論学術之勢力左右世界」と「新民説」はこの事実を証明している。前者ではフランスのボルテール、ロシアのトルストイと福沢諭吉を並べていう。「亦必ずしも新説を出さざるも、其の誠懇の気、清高の思、美妙の文を以て、能く他国の文明新思想を運びて本国に移植し、以て福を其の同胞に造す有り。此れ其の勢力も亦復偉大にして不可思議なる者有り。法国の福禄特爾 Voltaire 一六九四年に生れ、一七七八年に卒す、日本の福沢諭吉去年卒す、俄国の託爾斯泰 Tolstoi 今尚生存す、の諸賢是れなり。……福沢諭吉は明治維新以前に当りて師の授ける所無く、自ら英文を学べり。嘗て華英字典を手抄すること一過せり。又独力を以て一の学校を創り、名ずけて慶応義塾と曰い、一の報館を創り、名ずけて時事新報と曰い、今に至るまで日本の私立学校・報館の巨擘為り」。

と評価しているのである。梁啓超はさらに続けて、

「書を著すこと数十種、専ら泰西文明思想の輸入を以て主義と為せり。日本人の西学有るを知るは、福沢より始れり。其の維新改革の事業も、亦福沢を顧問とする者十に六、七なり。託爾斯泰……

此れにに由りて之れを観るに、福沢特爾の法蘭西に在る、福沢諭吉の日本に在る、託爾斯泰の俄羅斯に在る、皆必ず少可らざるの人なり。苟も此の人無くんば、則ち其の国或いは進歩するを得

ず、即ち進歩も亦未だ必ずしも是くの如く其の驟かならざるなり」

と最大級の評価を与えているのである。さらに「新民説」では、特に「自尊を論ず」の一節を設け、「日本の大教育家福沢諭吉の学者（筆者註：学ぶ人の意味で日本語の〝学者〟の意味ではない）を訓うるや、独立自尊の一語を標提して、以て徳育最大の綱領と為せり。夫れ自尊、何を以てか之を謂うか。自からは国民の一の分子なれば、自尊は国民を尊ぶ所以の故なり。自からは人道の一の阿屯なれば、自尊は人道を尊ぶ所以の故なり」

と、彼一流の新民体と呼ばれる熱っぽい名文で力説している。以上のような梁啓超の評価については、すでに我国の一部には知られているが、筆者は先に魯迅の『集外集拾遺』にすこぶる不思議なる福沢諭吉に関する評価が収録されていることに気付いており、このような評価がどうして生ずるに至ったか、いささか考察を加えておきたい。魯迅の「什么話」（三）（なんたる話）は文学革命の桧舞台である雑誌『新青年』の六巻二号（一九一九年二月刊）に最初に掲載されている。『新青年』の頃の福沢評価は和田教授の研究にもある通り、かなり活溌なものがあったが魯迅がこの文章で取上げたように、かなり短絡的な理解もあった。魯迅はもちろん日本留学生出身であり、福沢諭吉に対する理解を欠いていたとは思われない。ただ維新派の梁啓超とは政治的・文学的立場を留日中から異にしていた。『魯迅全集』中、福沢諭吉に触れた唯一の個所は、「什么話」（三）で主として批判の対象としている林伝甲の『福建郷談』中の次の一節である。

又曰：「日本維新、実頼福沢諭吉之小説。吾国維新、帰功林琴南畏廬小説、誰曰不宜？」（又曰く、日本の維新は、実に福沢諭吉の小説に頼る。吾が国の維新は、功を林琴南・畏廬の小説に帰す。誰か宜しからずと曰わんや）

福沢諭吉が林琴南と並んで小説家視され、しかもその表現にはまさしく梁啓超流の最大級の言葉が連ねられている。この文脈は梁啓超の「一国の民を新たにせんと欲すれば、先づ一国の小説を新たにせざる可からず。故に道徳を新にせんと欲すれば必ず小説を新たにし、宗教を新たにせんと欲すれば必ず小説を新たにし、政治を新たにせんと欲すれば必ず小説を新たにし……何を以ての故か。小説は不可思議の力有りて人道を支配するの故なり」（一九〇二「論小説与羣治之関係」小説と社会の関係について）を受けていることは容易に推測できる。そこで清末の士大夫の文学―桐城派―の古文作家であり、同時に欧米小説の翻訳者を兼ねた林琴南と福沢の役割を同一視する誤りを犯すに至ったのであろう。

それにはまた次のことも考えられる。先に引用した「論学術之勢力左右世界」のうち、「亦福沢を顧問とする者十に六、七なり。託爾斯泰……」に続く文章に於いて、トルストイの小説がロシアの思想革命に与えた影響を最大級の言葉で評価している。林伝甲が梁啓超のこの論文を読んでいる可能性は極めて強いから、福沢とトルストイの著作の方向を深く吟味することなく、トルストイ

に対する評価を借用した線も出てくる。即ち「託爾斯泰は地球第一の専制のの国に生まれるも、人類同胞の兼愛平等主義を大倡す。其の論ずる所は蓋し別に心に得る有り。尽く東・欧諸賢の説に、憑藉する者に非ざるなり。其の著す所の書は大率皆小説にして、思想高徹、文筆豪宕なり。故に俄国(ロシア)全国の学界、之が為めに一変す。近年以来、各地の学生、咸(みな)専制の政に不満にして屢々結集し、要求する所有り。政府之を捕え之を錮(こな)ぎ、之を放ち、之を遂うも禁ずること能わず。皆託爾斯泰の精神、鼓鑄する所の者なり。此れに由りて之れを観るに、福禄特爾の……」

近代中国に於いて、小説の社会的政治的役割に最初に着眼したのは梁啓超であった。しかも明末の李卓吾が小説戯曲を詩文と同等と認めた段階に止まらず、小説に最大の影響力を認めたのである。このような情況を考慮に入れるならば、林伝甲の「日本の維新は、実に福沢諭吉の小説に頼る」との表現も、理解できないことでもない。

二

清末から文学革命の時期に中国の知識人たちに注目された福沢諭吉は、その後どのように評価されて来たか。このことに言及した文献を寡聞にして筆者は知らない。少くとも、新文学の主要な担手たちの視野からは遠ざかったように思われる。

今、手元に一九六八年三月に、国立台湾大学文学院から刊行された李永熾氏の『福沢諭吉社会思想之研究』と題する三七二ページに及ぶ専著がある。この書物を見ても、清末から現在に及ぶ中国に於ける福沢諭吉評価は全く欠落し、このような視点から同書を利用することは不可能である。この研究は『福沢全集』(全十巻　時事新報社編　大正十五年刊)と『福沢全集』(全七巻　慶応義塾編　昭和九年　岩波書店刊)の精読のうえに基礎を置き、関連のある研究書や論文にひろく目を通すばかりでなく、松平定信・本多政信・本居宣長の著作にまで言及している。この篤実なる研究者は一九六六年に同大学の歴史研究所を卒業した若手の研究者であり、もともとは卒業論文として陳固亭・許倬雲の両教授に提出されたものである。

その目次は次の通りである。

弁言
序編　福沢諭吉的(の)思想背景
第一章　封建社会的(の)没落
　第一節　社会的変遷
　第二節　封建経済的解体
　第三節　外国勢力的激盪
　第四節　社会改革与(と)適応
第二章　福沢諭吉的思想成長
　第一節　蘭学塾時代的福沢諭吉
　第二節　福沢由=蘭学-転=入英学-的動機
　第四節　由=啓蒙-到=国権思想-
正編　福沢諭吉的社会思想

第1章　社会演化論
第一節　文明定義及其演化階段
第二節　智徳的演化
第三節　知識的価値
第四節　観察=社会演化=的方法
第二章　西洋文明与日本文明的比較
第三章　社会改革原則
第一節　独立自尊——個人間的平等
一、天賦人権——自由・平等与独立
二、智徳与学問
三、「人間交際」
四、個人与政府
第二節　家庭改革——男女間的平等
一、社会対婦女的圧制
二、謀=求男女平等=的目的
三、謀求男女平等的方法
第三節　国家独立——国家間的平等
一、国家独立
二、政治形式論
三、官民調和論
四、民権与国権
第四章　社会改革与教育
第一節　教育与社会
第二節　教育与政治
結論
附録
一、福沢諭吉年表
二、参考書目

この綿密な構成を持つ大著は、海外での福沢研究書として紹介される価値があるが、まだ慶応義塾内においてもわずかに塾史資料室に一本を蔵するのみで知られているというわけにはいかない。そこで筆者は、できるだけ忠実に『福沢諭吉社会思想之研究』の内容を紹介するとともに、気付いた点に二、三触れておきたいと思う。

序編第一章第一節に於て著者の李永熾氏は次のような表現で筆を起している。「日本では源頼朝が鎌倉幕府を開設してこの方、社会には身分・階級の厳格なるけじめがあり、四民の境界はいささかたりとも侵すことはできなかった。学術・武芸・遊芸のそれぞれの分野ではいずれも形式を重視し、形式に違反すれば即ち道徳に違反したと見なされ、異端視されたのである。この種の厳格なる階級制度は、織田信長と豊臣秀吉を経て次第に強化され、徳川家康が江戸幕府を創設するに至って完成を告げた。この種の情勢の下において、もろもろの個人の自由の類のごときは、ひとしく禁止された。この四つの終身改変することのできない階級は、すなわち士農工商であり、これを四民という」

著者は日本のこのような性格の封建制度の解体を、大宰春台

「産語」、福沢全集「一身の広告」、大宰春台「経済録拾遺」、加田哲二「明治初期社会経済思想史」、本庄栄治郎「日本社会経済史」小林庄次郎「幕末史」、「世事見聞録」（近世社会経済叢書）の資料、研究書を援用しながら跡付け、「商業行為の発生と土地の兼併とにより、富者はますます富み、貧者はますます貧しくなり、人民は次第に都市に集中し、都市の興起をうながした。農村経済を以て基礎とする封建体制は、徳川の中期に、すでにようやく没落に向い、階級の厳明、職業の変更困難という現象も、これまた様相が変りはじめ、幕末に到り、外国勢力の激盪と農民暴動とを経て、封建社会は崩解を起し、ついに解体するに至った」と結論するのである。

第二節では農民一揆と都市における打毀運動に焦点を搾り、徳川中期以降の封建的身分制度が崩解しはじめ、次第に資本主義的要素が発達する様子に注目し、「これが福沢が実業を重視し、工商を提唱する主要なる原因」であると見ている。この節の引用及び参考書目は、中村菊男「近代日本と福沢諭吉」、松平定信「国本論」、本多政信「本佐録」、本居宣長「秘本むくしげ」、加田哲二「明治初期社会経済思想史」である。

第三節では幕末における外国勢力の侵入を詳述し、「福沢が極力国権を提唱したのは、すなわち外国勢力が日本に侵入し、日本の独立に影響するのを恐れたからである」と関係づけている。引用及び参考書目：加田哲二解題「神田孝平福沢諭吉集」、吉田東伍「徳川政教考」、辻善之助「日本文化史」、加田哲二「明治初期社会経済思想史」、「福翁自伝」、渡辺修次郎「民情如何」、竹越与三郎「新日本史」、森谷秀亮等「幕末維新文化」（『日本文化史大系』）、「慶応義塾百年史」上巻、増訂「武江年表」、福沢全集緒言「唐人往来」

第四節では明治維新の経過を略述し、明治元年から八年に至る「日本の文明開化論がもっとも盛行した時期」の四類の文明開化論者中で、「中立の立場を採用する福沢諭吉の慶応義塾派」について「この一派は日本の当面の急務は社会と経済の発展を計ることであると信じ、富国を以て目的とする。その理論は英国の個人主義と功利主義を基礎としている」とまとめ、さらに西南の役前後の国会開設運動に対する福沢の態度、「西洋事情」が社会人心に与えた影響について考察している。引用及び参考書目：加田哲二「明治初期社会経済思想史」、余又蓀「日本史」、森谷秀亮等「幕末維新文化」（『日本文化史大系』）、藤井甚太郎・森谷秀亮共著「明治時代」（『綜合日本史大系』）、辻善之助「明治時代」（『日本文化史』）、「高山樗牛全集」第四巻、浅井清「明治立憲思想史に於ける英国議会制度の影響」、伏見猛弥・阿部仁三共著「福沢諭吉」、石河幹明「福沢諭吉伝」、加田哲二解題「神田孝平福沢諭吉集」

第二章　前の章で福沢をめぐる社会的背景を分析した著者は、いよいよ福沢の思想的成長を叙述する段階に到達した。ここでも著者は豊富な資料を充分に活用しながら過不足のない概括を行なっている。第一節では最後にその文章についても、「福沢の文章

には一つの特色がある。それは通俗明暢であることである」と触れている。第一節の引用及び参考書目：棚瀬襄爾「文化人類学」、「福翁自伝」、石河幹明「福沢諭吉伝」、「慶応義塾百年史」上巻、加田哲二解題「福沢諭吉神田孝平集」、長与専斎「松香私志」緒方富雄「緒方洪庵適斎塾のこと」（「慶応義塾百年史」上巻の記載に拠る）、原敬談「福沢先生の文章」原載「時事新報」（高橋竜雄「国語国文から観た福沢先生」『史学』第十三巻第三号に拠る）、「福沢全集緒言」

第二節は蘭学から英学へであり、その引用及び参考書目は「慶応義塾百年史」上巻、「福翁自伝」、石黒忠悳著「懐旧九十年」である。

第三節ではその外遊の意義と「西洋事情」の意義を説くが、末尾に近く「慶応義塾は以後大いに拡張を事とし、幼稚園より大学に至るまで設け」とあるのは、いうまでもなく「幼稚舎より大学に至るまで設け」でなければならない。この節の引用及び参考書目は、「福翁自伝」、木村芥舟「福沢先生を憶う」「菊窓偶筆」（石河幹明「福沢諭吉伝」に拠る）、福地源一郎「懐往事談」、木村芥舟「奉使米利堅紀行」（「慶応義塾百年史」上巻に拠る）、「華英通語凡例」、「西洋事情」初編、「福沢全集緒言」、「慶応義塾百年史」上巻。

第四節では著者は「（明治）八年以後になると、政府が推進してきた文明政策はすでに一段落を告げ、人民は十余年にわたる文明開化の風に包まれて、西洋に対する認識もようやく深まった。しかしながら国内ではまたもや民権論争をひきおこし、官民が互いに対立して、虎視眈眈たる外国勢力の存在を忘れてしまった。そこで福沢は国権を取上げ、官民の調和を主張し、一致して外に対することを求めたのである。

よってわれわれは、八年以前を福沢の啓蒙の時期と見なし、八年以後を国権の時期と見なすならば、或いは誤りないかと思う」と結論する。この節の引用及び参考書目：「福沢全集緒言」、福沢諭吉「外国人の内地転居を許す可らざるの論」（加田哲二解題「神田孝平福沢諭吉集」、「条約十一国記」、「世界国尽序」。

正編　福沢諭吉の社会思想　この正編は全四章から成り、八〇ページから三五三ページまでを占め、本書の主要なる部分となっている。まず第一章第一節に於いて加田哲二の「明治初期社会経済思想史」と福沢の「文明論之概略」を引き、福沢の文明論は一種の社会発展の理論であり、福沢自身も文明は変化するものであり、かつまた人心の変化は、非常に推し量りがたいということを認めていると述べ、文明の所在とその発展段階観を整理している。この節の引用及び参考書目：加田哲二「明治初期社会経済思想史」、「文明論之概略」、「学問之勧（のすすめ）」、「民情一新」、「日本男子論」、「掌中万国一覧」、「西洋事情外編」、石河幹明「福沢諭吉伝」第二巻。

第二節の主題は智徳も進歩するという思想についてである。福沢は智が徳を決定すると考え、文明がますます進化すれば、智力もますます進化し、徳義もそれとともに進化するとの立場を取

った。ただし古いものを一概に棄てて顧ないというのではなく、不合理なもの、文明の要請に合わないものを棄てようというのであって、故に合理主義と見るべきであると結論している。この節の引用及び参考書目：「文明を買ふには銭を要す」、伏見猛弥・阿部仁三著「福沢諭吉」、「道徳の進歩」、「徳教之説」、「福翁百余話」、「文明論之概略」、「儒教主義」、「忠義の意味」、「道徳の標準」、「徳教の本は私徳に在り」(一)、「民情一新」I。

第三節では今日の西洋文明の根源は「物理の学」に基づいているとの認識について述べる。有形のものの法則を究明することがすべてに優先する。一切の学問の根本であると考えたばかりでなく、社会全体に直接的な影響を及ぼしており、人類の精神と智徳を改変する働きを持つと見て取った。しかし福沢は西洋至上説を提唱したのではなく、皇学・漢学と洋学を進取主義の方向に傾斜しながら調和したのである。この節の引用及び参考書目：「慶応義塾学生に告ぐ」、「福翁百余話」、「西洋流と古学流」、「福翁百話」、「物理学の要用」、「民情一新」、「中津留別之書」、伏見猛弥・阿部仁三著「福沢諭吉」、「学問之勧」、「徳教之説」、「文明論之概略」。

第四節では、福沢の社会に対する研究法を観察すると第一に統計法、第二に冷算法、第三に歴史法、第四に演繹法を駆使していると分析している。第二の冷算法とは「士人処士論」の説く、おおよそ事物の利害を判断するには、その平均数に基づくことがもっとも重要であるとの主張とその応用を指している。この節の引用及び参考書目：「文明論之概略」、「士人処士論」、「教育の事」、「老壮論」、伏見猛弥・阿部仁三「福沢諭吉」。

第二章では福沢自身の西洋文明と日本文明の比較論を整理する。この章の引用及び参考書目：家庭坐談「進歩と変化との区別を知らざれば大なる間違を生ずるを論ず」、「西洋事情」、「明治初期社会経済思想史」、「近代日本と福沢諭吉」、「中津留別之書」、「文明論之概略」、「徳教之説」、「学問之勧」、「民情一新」、伏見猛弥・阿部仁三「福沢諭吉」。

第三章の社会改革の原則は、本書においてもっとも大きなスペースが与えられており、独立自尊―個人間の平等、家庭改革―男女間の平等、国家の独立――国家間の平等を三本の柱として組立てられている。まず第一節の独立自尊―個人間の平等では、「一身独立して一国独立す」の思想の背景を詳細に分析する。福沢の考えを整理すれば、「独立は文明の先決条件であり、個人の独立は国家の文明と独立の必ず経るべき段階である」ということになる。第一節は更に一、天賦の人権―自由、平等と独立。二、智徳と学問。三、人間交際。四、個人と政府、に分けられる。これ等の項目毎に論じた後に、著者は「福沢の所謂独立自尊は、まことに社会改革のための基本原則であり、また文明を促進する基本的な手段である」と結論している。その引用及び参考書目：辻善之助著「明治時代」(『日本文化史』Ⅶ)、「学生処世の方向」、「学問之勧」、「私権論」、「西洋事情」、「童蒙教草」、加田哲二著「明治初期社会経済思想史」、「独立自由」、「福翁百話」、「慶応義塾学報」

第三十九号「福沢先生哀悼録」、「独立の大義」、「故大槻磐水先生五十回追遠の文」、「福翁百余話」、「徳育如何」、「独立の大義」。

二、の智徳と学問においては、「学問は福沢の思想体系にあって、個人の独立自尊を涵養する主要なる要素である。学により智があり、智があるから、徳がある。徳は智によって決定され、智は学のために造成される。そこで独立自尊を涵養しようとすれば学ばなければならず、智徳の独立を希求しようとすれば、学ばなければならない」と要約している。その二の引用及び参考書目：「学問之勧」、「西洋事情」、石河幹明「福沢諭吉伝」第二巻、「学問之勧」、「文明教育論」、「通俗国権論」、「文明論之概略」、中村菊男著「近代日本と福沢諭吉」、「品行論」、「福翁百余話」、「福翁百話」。

三、の人間の交際においては、(a)利人と利己を論ず。(b)功利の合羣性。(c)社会規範中の修己の方式、に分けて論じられている。(c)では、謙譲、仁心、労働を重要な徳目として、怨望、怒を排除すべき態度として掲げている。その三、の引用及び参考書目：「士人処世論」、「童蒙教草」、「西洋事情外編」、「西洋事情」、「福翁百話」、「学問之勧」、「一身の広告」、「文明論之概略」、田中米作撰「独立自尊は仁義なり」（「慶応義塾学報」一四二号）、「日本婦人論」。

四の個人と政府においては、(a)政治哲学、(b)権利と義務、(c)契約下の守法、(d)契約行為を糾正する方式、に分けられている。「結論的にいえば、人民と政府とは契約関係によって存在する。これはすなわち天賦人権の平等論に基づいて生みだされたものであり、その目的は全国に独立自尊の気風を涵養して、人民をして政府を冒犯せず、政府もまたみだりに人民に干渉する行為をなさず、それぞれがそれぞれの独立心を持たしめるにあり、かくてはじめて福沢の最高理想―全国の独立が達成できるのである」その四、の引用及び参考書目：「学問之勧」、「士人処士論」、中村菊男著「近代日本と福沢諭吉」、「品行の事」、「西洋事情外編」、「五九楼仙万の寄書」。

第二節のその一、社会の婦女に対する圧制では、著者はまず「日本は大化の改新以後、中国化が非常に徹底し、上は日本の官制と街坊より、下は日本の習俗教育に至るまで、中国文化の痕跡を留めないものはない。……中国の男権至上論は、日本においても当時の支配思想を形成していた。もっとも顕著なる例は貝原益軒の著した「女大学」の一書である。この書物は中国の「女論語」に基づいて撰述したもので、内容は主として日本の婦女の行為を規戒しておりやはりまた男子の立場に立って婦女の挙動を束縛する書物の一つである」といい、これにすぐ続けて福沢の「女大学の流毒」の文章を引用している。そして福沢の著作にひろく当った上で、その思想を分析し、一、社教の影響。二、一夫多妻の害毒。三、女子の無学無識の促成。四、男女関係の隔離。以上のうち第一項の社教（社会習俗を支配する教育のことで、すなわち福沢の所謂世教である）の影響が最大であり、その他の三項はみなこの項目の副産物であるとまとめている。その一、の引用及び参

考書目：「中津留別の書」、「女大学の流毒」、「日本婦人論」後編、「女大学評論」、「福翁百話」、「日本婦人論」、「日本流か西洋流か」、「品行論」、「日本男子論」、「学問之勧」、「男女交際論」、「男子たるものも大に注意す可し」、「男女同罪」、「新女大学」。

その二、男女平等を追求する目的、では福沢が本質的な男女平等論者であることを論証する。人倫の大本は夫婦にあり、夫婦あって後に親子あり、兄弟姉妹があるとの「福翁百話」の「一夫一婦偕老同穴」をはじめ、私徳の元素は夫婦の間に胚胎する。男女両性の関係は立国の大本であり、禍福の起源であるとの「読倫理教科書」の見解を引用しつつ、「福沢が男女平等を促す目的は、一面ではかれの思想の根源―人権の尊重、独立自由に基づいており、一面ではかれが生涯にわたって追求した目標―国家の文明と独立を完成させたいと考えるからである」と結論する。その二、の引用及び参考書目：「中津留別之書」、「学問之勧」、「日本婦人論後編」、「日本婦人論」、「女大学の流毒」、「福翁百話」、「西洋事情外編」、「日本男子論」、「通俗道徳論」、「福沢先生浮世談」、「女大学評論」、「読倫理教科書」、「徳教の本は私徳に在り」、「婦人も亦その責を免かれず」、「男女交際論」、「新女大学」。

その三、男女平等を追求する方法、では、福沢の考えを整理して次の三点に分けて説いている。すなわち、一夫一妻制の厳格なる実施、男女交際の自由平等、婦女の智徳と独立心を向上させること。その三、の引用及び参考書目：「福沢先生浮世談」、「日本男子論」、「西洋事情外編」、石河幹明著「福沢諭吉伝」、「福翁百話」、「離婚の弊害」、「男女交際論」、「教育普及の実」、「婦人の生意気は鳥なき里の蝙蝠のみ」、「女子教育」、「新女大学」、「西洋流と古学流」、「慶応義塾改革の議案」、「日本婦人論」、「女子教育の方法」、「女大学評論」、「日本婦人論」。

第三節のその一、国家の独立においては、例えば福沢のまず一身の独立を計り、継いで一国の独立を計るとの発想、国家の文明と独立は、完全に国内人心の親和力の大小を見ることによって定るとの独自の議論を丁寧に追って整理している。その一、の引用及び参考書目：「学問之勧」、「時事小言」、「文明論之概略」、昆野和七校訂「学問之勧」、中村菊男「近代日本と福沢諭吉」、「五九楼仙万の寄書」、「品行論」、「士人処世論緒言」。

その二、政治形式論、では、国家の独立には国内の人心を一つに結集し、一致して外に当ってこそ、はじめて外国と同等の地位に到達し、国家をして独立を獲得させることができるとの前の小節の議論を承けて、この小節ではもっぱら政府の体制を検討している。そして英国式の立憲君主制を日本の民情と文明に最も適合していると福沢が見ていると結論するのである。その二、の引用及び参考書目：「文明論之概略」、「西洋事情」、「民情一新」、加田哲二著「明治初期社会経済思想史」、中村菊男著「近代日本と福沢諭吉」、「時事大勢論」、辻善之助「明治時代」（「日本文化史」Ⅶ）、「帝室論」、「尊王論」。

その三、官民調和論、では、まず士族を中心とした勢力を三つに分ける。第一類の人物はいわゆる藩閥官僚であり、第二類の人

物は民権論者であり、第三類の人物は守旧派の不平士族である。西南の役以降、第三類の人物たちは屈服し、基本的には国会開設をめぐる藩閥官僚と民権論者の対立軋轢が主要な矛盾となった。この段階で提出された福沢の官民調和論の意義を分析する。その三、の引用及び参考書目：「分権論」、石河幹明「福沢諭吉伝」第三巻、「時事大勢論」、「条約改正」、「学者安心論」、「官民調和論」「丁丑公論」、「調和の急は正に今日に在り」。

その四、民権と国権、では、福沢の主張する国権は、民権を以てその基礎としており、決して国権を以て民権を抹殺しようとするものではない。それ故にかれは国権は権道であって、民権が正道であるというのである。その四、の引用及び参考書目：「福沢全集緒言」、「通俗国権論緒言」、「通俗民権論」、「天下自省す可きものあり」、「時事小言」、「藩閥寡人政府論」。

第四章の社会改革と教育、では、「社会において、福沢は教育を以て手段となし、国民の（もとより男女を包括する）独立自由の風気を培養しようとした。政治上においても、また教育を以て手段となし、社会の風気を基礎として、全国一致の風気を達成しようとした。結論的にいえば、すなわち教育を以て国家の独立と文明を促進したのである」

第一節の教育と社会、の引用及び参考書目：川合貞一「福沢先生の教育観」（『史学』第十三巻第三号）、「福翁自伝」、「学事の改革の趣旨」、「学生諸氏に告ぐ」、「慶応義塾之記」、「福翁百余話」、「道徳の進歩」、「慶応義塾改革の議案」、「西洋学と古学流」、「福翁百話」、「教育の事」、「徳育如何」、「公共の教育」、「西洋事情外編」、「政事と教育」、「時事小言」、「文明教育論」、「福翁百話」、「学問之勧」、「文明論之概略」、「教育論」（羽仁五郎著「白石・諭吉」）、「体育の目的を忘るる勿れ」、「貧富智愚の説」、小幡篤次郎等撰「修身要領」（石河幹明「福沢諭吉伝」第四巻）、「公共の教育」、「華族の教育」、「中村栗園先生の書翰」、「慶応義塾学生に告ぐ」。

第二節の教育と政治、の引用及び参考書目：「学問之独立」、「博士会議」、中村菊男著「近代日本と福沢諭吉」、「帝室論」、「政治と教育」、「教育の経済」、「社会の形勢学者の方向」、「耶蘇教会女学校の教育法」、「政府は国民の公心を代表するものなり」。

結論、では、福沢の社会思想を次のように要約する。すなわち一、漸進主義。二、自由主義、（外在的自由、すなわち行動の自由。内在的自由、すなわち心霊上の自由に分けて論ずる）三、功利主義。四、教育の法則（実学の重視、政治と教育の分離に分けて論ずる）五、言行の影響。

ただし著者は明治十五年以降の言論活動の一部に「民族的狂熱の境地に陥るを免れていない」とし、その具体的例として、「たとえば中日間の甲午之役（日清戦争）において、かれは断乎たる主戦派であり、真先に国民の団結、軍費の捐助、勝利争取の言論を発表し、また金玉均と勾結しているが、かれの偏狭なる愛国主義がここに表れている」と断じている。これは中国の立場からする民族主義的な甲午之役評価と見ることができよう。しかしなが

ら著者は基本的には、「福沢が一九〇一年逝去してから、今日まで六十五年になるが、封建制度より自由平等に転換せしめた、日本近代文明の指導者である」と、最大級の評価を与えているのである。

参考書目、（筆者註：本書全体にわたるもの）

福沢全集　全十巻　時事新報社編　大正十五年刊
続福沢全集　全七巻　慶応義塾編　岩波書店　昭和九年刊
石河幹明撰　福沢諭吉伝　全四巻　岩波書店　昭和七年刊
加田哲二著　明治初期社会経済思想史　岩波書店　昭和十二年刊
慶応義塾百年史　上・中巻　慶応義塾　昭和三十三年
羽仁五郎　白石・諭吉　岩波書店　昭和十二年
伏見猛弥・阿部仁三著　福沢諭吉　北海出版社　昭和十二年
辻善之助著　江戸時代　下（日本文化史Ⅵ）春秋社　昭和三十五年
辻善之助著　明治時代（日本文化史Ⅶ）春秋社　昭和三十六年
中村菊男著　近代日本と福沢諭吉　泉文堂　昭和二十八年
加田哲二解題　神田孝平福沢諭吉集　誠文堂新光社　昭和十一年
田中一彦編　幕末維新文化（日本文化史大系）誠文堂新光社　昭和十五年
藤井甚太郎・森谷秀亮共著　明治時代（綜合日本史大系12）内外書籍　昭和九年
大隈重信著　日本開国五十年史　商務印書館
余又蓀著　日本史3　中華文化出版事業委員会　民国四十五年
川合貞一　福沢先生の教育観　史学第十三巻第三号
高橋竜雄　国語国文から観た福沢先生　史学第十三巻第三号
小泉信三　福沢先生の国家及社会観　史学第十三巻第三号
松本芳夫　歴史家としての福沢諭吉先生　史学第十三巻第三号
間崎万里　福沢諭吉の「西洋事情」　史学第二十四巻第二、三号
The Origins of Entrepreneurship in Meiji Japan, by Johonners Hirschmeier S. V. D., Harvard Univ. Press. 1964

三、

中国における同時代人及びそれに少しく遅れる人びとの間での福沢諭吉の存在は、研究の対象としてではなく、隣国の偉大な思想家・文豪・教育家として意識されていた。ところが文学革命以降、中国知識人の間でほとんど福沢について言及されなくなる。おそらくこのことと、李永熾が結論で触れていた「民族的狂熱の境地に陥るを免れていない」という評価とも関係があろう。日本の大陸武力進出が強化された一九二〇年代以降の中国で最も注目されていた知識人は第一次世界大戦の頃の平和主義者武者小路実篤であったといえば、或いはこのことが理解してもらえるかも知れない。プロレタリア文学時代以降においても、ひろく中国の知識人の間で武者小路の動向が論議されていたほどである。

第二次世界大戦がおわって二十数年、ようやくここに本格的な

福沢諭吉研究が登場するに至った。一、と二、の部分の比重構成にはもとより均衡を欠くものがあるが、これは李永熾氏の著書の可能な限り客観的な紹介を執筆の直接の動機としたことの結果にほかならない。日本における福沢研究がどのように反映しているか示すために、各節及び全体の引用参考書目には省略はまったくない。読者によって、さまざまな感想をお持ちになられる向きがあることと思われる。

—了—

会員訃報

会田倉吉氏は、昭和五十一年十月二十九日午後七時十三分、脳出血のため三田の済生会中央病院で死去された。享年六十一才。

慶応義塾塾史編纂所主事を経て、塾史資料室長・同大学講師であった。

主な編著書

慶応義塾百年史（全六巻）
万延元年遣米使節史料集成（第四巻）
福翁自伝（校注・旺文社文庫）
福沢諭吉（人物叢書）

「史学」掲載論文

初期の日米関係概観　一六—二
江戸時代の米価対策の一例　二二—一
——享保十五年七月の御買米令について——　二七—二・三
宣教師ナップと福沢諭吉　三〇—三
慶応義塾のカロザス雇入れについて　三〇—四
カロザスの経歴と人柄　三一—一・四
カロザスの慶応義塾に対する影響　三六—二・三
カロザスの事績　四三—一・二
紀州と福沢諭吉